



Department of Otolaryngology-Head and Neck Surgery,
Nara Medical University

2021年 Facebookページ投稿記事

<https://www.facebook.com/otolaryngologyhnsnaramed/>



2021年1月1日



新年明けましておめでとうございます。旧年中は大変お世話になりました。昨年2020年は新型コロナに大きな影響を受け、多くのものを失いました。FB上でも、締めである忘年会、納会ともとんでしまいました。今年2021年の干支は「丑年」。先を急がず、目前のことを徐々に着実に進めることが将来の成功につながっていく年、と言われていています。まだまだ予断を許さない状況ではありますが、牛の歩みも千里、やがて必ず来るafter coronaに向けて努力を怠らず、徐々に成果が挙げ、着実に挽回していきましょう。本年もどうぞよろしく願い申し上げます。



2021年1月8日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。本日金曜は、新型コロナに注意を払いつつ、対面での新5回生1週ポリクリ総括初めをさせていただきました。「舌根部原発の中咽頭癌、化学放射線治療を行った上での外科手術となった症例」を5人5様にしっかりまとめてくれました。めまいクルズスは、1週ポリクリを救急から見ためまい、4週/8週ポリクリを耳鼻科から見ためまいとして、症状の把握と疾患の理解を深めていただきました。関東に続き関西も厳しい状況です。安全で快適な週末三連休をお過ごしください。



2021年1月10日





第57回畝火新年総会・令和3年畝火研究会学術講演会が、昨日奈良ホテルにて開催されました。新型コロナウイルス第三波が収まりを見せない状況ですので、手指消毒を強化の上、例年より間隔を空けて着席し、懇親会は中止としました。

学術講演では、昨年学位を取得した蓮川昭仁先生(Surgical effects of type-I thyroplasty and fat injection laryngoplasty on voice recovery. ANL, 2021)、伊藤妙子先生(Vestibular Compensation after Vestibular Dysfunction Induced by Arsanilic Acid in Mice. BrainSci, 2020)、横田尚弘先生(Retrospective evaluation of secondary effects of hearing aids for tinnitus therapy in patients with hearing loss. ANL, 2020)が、それぞれの学位論文に関する講演を行いました。

また、本年度の若手畝火賞は執行雅之先生(Comparison of the video head impulse test results with caloric test in patients with Meniere's disease and other vestibular disorders. Acta Otolaryngol, 2020)、畝火賞は太田一郎先生(The impact of preoperative screening system on head and neck cancer surgery during the COVID-19 pandemic: Recommendations from the nationwide survey in Japan. ANL, 2020)が選出されました。

特別講演は、東北医科薬科大学医学部耳鼻咽喉科学教室教授の太田伸男先生に『耳鼻咽喉科免疫関連疾患のパラダイムシフト』を東北からリモート講演いただきました。



2021年1月16日



この度、長い間使用してきた奈良医大臨床研究棟の老朽化のため、耳鼻咽喉・頭頸部外科も研究室の引っ越しを行いました。新しい研究室はA病棟の最上階になりました。晴れた日には、大和三山の耳成山だけでなく、遠く若草山を望むことができる最高の景観が得られます。



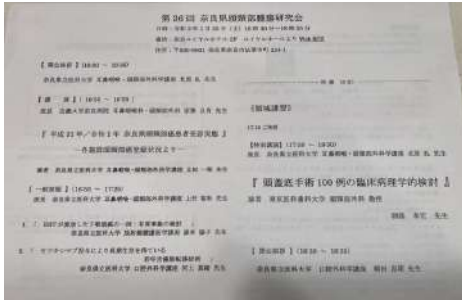
2021年1月22日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。本日金曜は先々週に続き新型コロナに注意を払いつつ、対面での新5
回生1週ポリクリ総括+めまいクルズスをさせていただきました。「内耳奇形を伴う両側高度感音難聴小児
例に対する人工内耳埋込術」という厳しい症例でしたが、5人5様にしっかりまとめてくれました。
米国大統領は一昨日Trump氏からBiden氏に交代となりましたが、新型コロナの感染拡大は即どうにかなる
ものではありません。我が国も引き続き厳しい状況下にあります。どうぞ安全で快適な週末をお過ごしくだ
さい。



2021年1月24日



令和3年1月23日、第36回奈良県頭頸部腫瘍研究会が奈良市の奈良ロイヤルホテルからハイブリッドWEBセミナー形式で開催されました。

まずは、今回のWEBセミナーでは冒頭より通信トラブルがあり、特に前半は音声・映像ともに十分にお届けできませんでした。深くお詫び申し上げます。

さて講演Iでは、「2019年奈良県頭頸部癌患者受診実態」について当科太田一郎講師が報告しました。一般演題では、奈良医大放射線腫瘍医学の森本陽子先生に代わり長谷川正俊先生が「BRTが奏功した下咽頭癌の一例：有害事象の検討」について、さらに奈良医大口腔外科の河上真緒先生から「セツキシマブ投与により長期生存を得ている若年舌癌肺転移症例」について発表がありました。

そして特別講演では、東京医科歯科大学頭頸部外科教授の朝蔭孝宏先生から「頭蓋底手術100例の臨床病理学的検討」と題して、東京よりライブ配信でご講演を頂きました。新型コロナウイルス感染症の現状とともに、朝蔭先生のこれまでの渾身の治療成果について熱く語って頂きました。直接お会いできず残念でしたが、素晴らしいご講演に改めてお礼申し上げます。



2021年2月5日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。本日金曜は先々週に続き新型コロナに注意を払いつつ、対面での新5回生1週ポリクリ総括+めまいクルズをさせていただきました。「甲状腺左葉の腫瘍に対する検査、診断、治療のプランニング」について、5人5様にしっかりまとめてくれました。4w/8wポリクリでお待ちしています。政府が先月発出した緊急事態宣言の解除延長を決定する中、近畿地方も予断を許さない状況に変わりなく、残念ながら来月予定していた奈良県医師会による「耳の日講演2021」も昨年に続き中止となりました。耳の日行事に関する報告書に「新型コロナの影響で今年も中止」と書くことに虚しさと抵抗を感じましたので、パワーポイント動画にナレーションを付けて、奈良県医師会HPから視聴できるようにアップしました。「認知症予防にもなる超高齢社会のめまい難聴対策」は本日から3月いっぱいまで視聴可能です。

○県医HPトップページ新着情報「お知らせ」 <http://nara.med.or.jp/>

○「耳の日講演2021」動画ページ http://nara.med.or.jp/for_residents/11594/

それでは皆様、良い週末をお過ごしください。



2021年2月19日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。本日金曜は引き続き新型コロナに注意を払いつつ、対面での新5回生1週ポリクリ総括+めまいクルズスをさせていただきました。ポリクリ総括は「鼻腔腫瘍の鑑別診断」について、5人5様にしっかりまとめてくれました。鼻腔からは様々な組織が出ますのであなどれません。めまいクルズスは学生さんから、半規管は2本でまかなえるのではないか、耳石器は3種類必要ではないか、など自発的な議論が交わされました。素晴らしいことです。是非4w/8wポリクリでお待ちしています。それでは皆様、素敵な週末をお過ごしください。



2021年3月5日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。関西3府県の緊急事態宣言は解除されましたが、引き続き新型コロナに注意を払いつつ、対面での新5回生1週ポリクリ総括+めまいクルズスをさせていただきました。総括は「鼻腔未分化癌」の診断と治療について、5人5様にしっかりまとめてくれました。4w/8wポリクリで、またのお越しをお待ちしております。

つい先日、令和3年3月3日は「耳の日」でしたので、各地で「難聴・補聴」に関する記事が取り上げられました。耳は聴覚と平衡覚を担当しておりますので、当科では「めまい・平衡」に関して「10分でわかるシリーズ」をアップしました。めまい患者さんにもわかりやすい内容になっています。

第1回10分でわかるめまいのしくみ

<https://youtu.be/Mh-jto1Tn9w>

第2回10分でわかるめまいの救急

<https://youtu.be/ki-limgw4Xw>

第3回10分でわかるめまいの検査

<https://youtu.be/mHQ-PhdWGjM>

第4回10分でわかるめまいの治療

<https://youtu.be/-ihwtHjNqwM>



2021年3月8日

【学会報告】

2021年3月5日～6日に第33回日本喉頭科学会及び第44回日本嚥下医学会がWEB共同開催という形で配信開催されました。当初は横浜での開催予定で久しぶりの横浜に行けなかったのは残念でしたが、まだ2週間（3月26日まで）はオンデマンドでいつでも気軽に見れるのは良いところです。

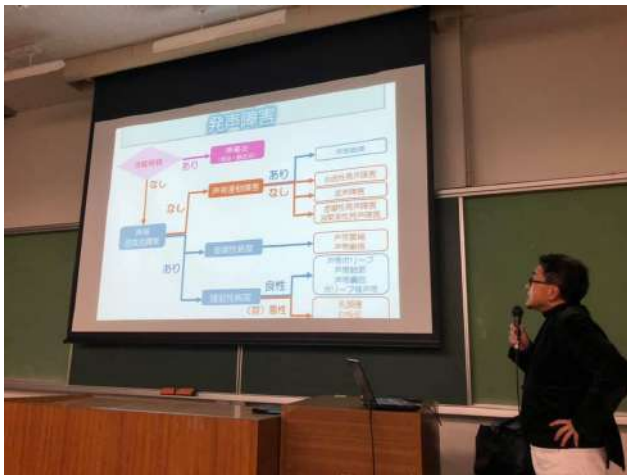
さて当科からは太田一郎講師が共通シンポジウムで「COVID-19と嚥下障害」について口演し、秋岡宏志医員は「NSTへの加入 -NSTからの外科的サポート目指して-」、足立詩織医員は「両側多発性の喉頭saccular cystの一例」についてポスター発表をWEB上行いました。

まだまだコロナ禍で油断できない日々が続きますが、早く現地開催で多くの全国の仲間と交流できる日が来ることを祈りつつ、引き続き感染対策を徹底し診療・研究・教育の充実をはかります。

<http://jla2021.umin.ne.jp/index.html>

<http://ssdj2021.umin.ne.jp/index.html>

2021年3月15日



本日より令和3年度の臨床統合講義が始まりました。初日は北原による『耳鼻咽喉科総論』『耳鼻咽喉科とめまい』に引き続き、大阪ボイスセンターからお越しいただいた望月隆一非常勤講師による『耳鼻咽喉科と音声言語医学』の3限連続の対面講義となりました。

久しぶりの対面講義とあって、1人おきの着席で講堂は満席となりました。講義はPDF、YouTubeで復習できます。めまいと音声という興味深い分野を、是非ご堪能ください。



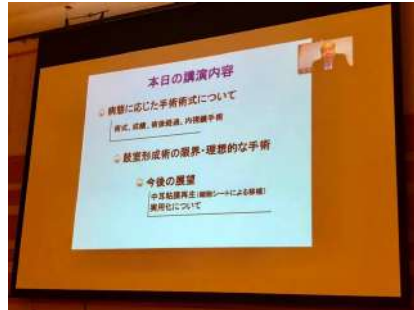
2021年3月19日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。関西に続き関東の緊急事態宣言も解除される方向のようですが、引き続き新型コロナに注意を払いつつ、対面での新5回生1週ポリクリ総括+めまいクルズスをさせていただきました。総括は「真珠腫性中耳炎」の診断と治療について、5人5様にしっかりまとめてくれました。鼓膜が陥凹して奥へ奥へと入り込み、骨を溶かして居場所を広げる厄介な病気。この分子機序がわかれば点耳で治るのではないか、と思いつつ25年が経ってしまいました。4w/8wポリクリで、またのお越しをお待ちしております。安全で快適な週末をお過ごしください。



2021年3月27日



昨年6月に予定しておりました第29回奈良県耳鼻咽喉科感覚医学講習会が、新型コロナウイルスによる延期のため、今年度最終土曜の本日、奈良県コンベンションセンターで現地/WEBのハイブリッド開催されました。特別講演1：東京医科歯科大学・堤 剛教授に「めまいのしくみー患者さんを納得させるにはー」、特別講演2：慈恵会医科大学・小島博己教授に「難治性中耳炎に対する再生医療ーヒト鼻粘膜上皮細胞シート移植を併用した新規治療の試みー」をご講演いただきました。いずれのご講演も奈良県の耳鼻咽喉科医にとって明日からの臨床に有意義な内容でした。お忙しい中、ご講演いただきありがとうございました。



2021年3月31日



九州大学の中川尚志教授からお預かりしておりました関 沙織先生が、本日今年度をもって東京に異動されます。関先生は南奈良総合医療センターの米山恵嗣部長を助けて2年3ヶ月、ご活躍くださいました。ありがとうございました。関先生の置き土産である花粉症・舌下免疫外来は是非引き継がせていただき、奈良県最南の総合病院・耳鼻咽喉科の価値を高めていければ、と考えております。

2021年3月31日



B8病棟を5年間支えていただきました谷口師長が、入退院支援センターに異動されることになり、本日がB8での最終勤務となりました。耳鼻咽喉科だけでなく、血液内科、総合診療科など緊急入院が多い科が集まったなか難しい舵取りをしていただきました。本当にありがとうございました。明日からは霧下師長をお迎えして新しいスタートをきります。コロナ禍で奈良県の感染状況も油断を許さない状況が続いていますが、看護部とも連携をとりながら緊張感をもって診療にあたっていきたいと思っております。



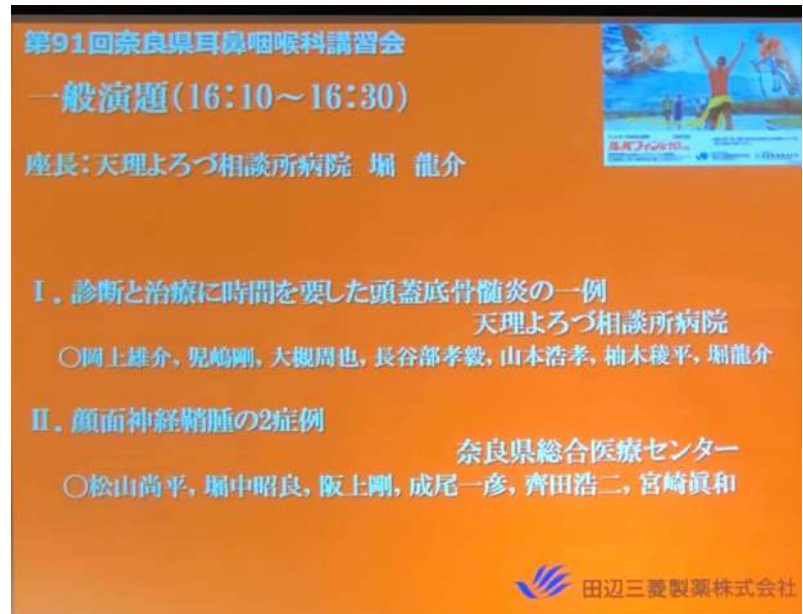
2021年4月9日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。本日金曜午後は今年度最初の5回生・1週ポリクリ総括でしたが、当大学の卒業生、在学生から新型コロナウイルス感染者が出たため、再びteamsを用いたweb形式での「めまい総括」となりました。大阪など3府県に新型コロナウイルス特別措置法にもとづく「蔓延防止等重点措置」が適応されました。変異型ウイルスも広がってきており、第3波を上回る第4波の到来が懸念されます。是非とも、この週末は安心安全にお過ごしください。



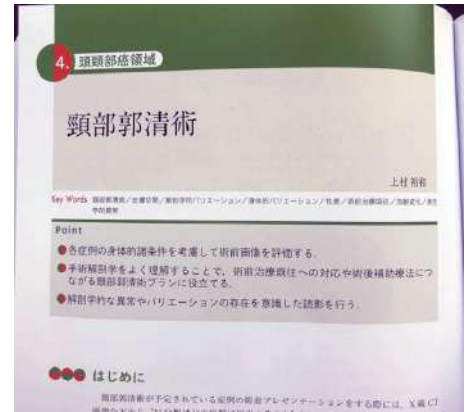
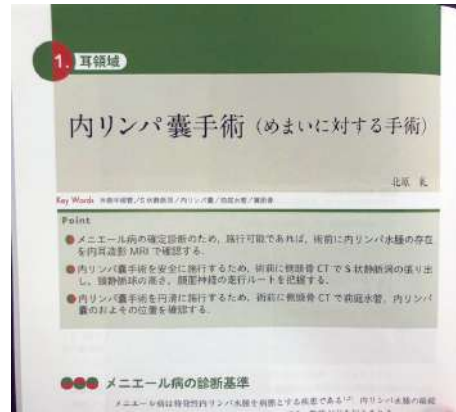
2021年4月10日



昨年の春講習は新型コロナウイルスの影響で中止になりましたが、本日第91回奈良県耳鼻咽喉科春講習が、橿原神宮前駅前にある橿原ロイヤルホテル(THE KASHIHARA)において、acrylic plateやface shieldを使用した感染対策を講じて現地開催されました。

一般演題では、前回、前々回に続き、奈良県総合医療センターの松山尚平先生が「顔面神経鞘腫の2症例」を講演しました。特別講演には、藤田医科大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 教授の楯谷一郎先生を2年越しにお招きして「鼻咽喉領域の最新治療について：ロボット支援手術」についてご講演いただきました。ちなみに昨年の秋講習と同様、web配信はなく現地参加のみ、会場は一席ずつ空けての着席、さらに第二会場を用意しました。

2021年4月19日



耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の手術を安全に施行するにあたり、メスさばきと同様に重要なのが解剖熟知です。ヒト正常解剖の熟知は勿論ですが、症例によるバリエーションや病変によるデビエーションは術前画像で慎重に確認しておく必要があります。

耳鼻咽喉科・頭頸部外科 増刊号では、静止画と動画をふんだんに使用しているのので、術前画像と術中解剖の整合性を理解することができます。

今回、奈良医大めまいセンターから「内リンパ嚢手術」、頭頸部外科マスターから「頸部郭清術」で執筆参加しております。



2021年4月23日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。本日金曜午後は5回生・1週ポリクリ総括+めまいクルズスでした。新型コロナウイルス学内感染のため先々週はweb形式でしたが、今週は落ち着きましたので対面実習となりました。総括は「頬部悪性腫瘍：耳下腺-皮膚-咬筋-頬粘膜合併切除、頸部郭清術、遊離前外側大腿皮弁再建」を5人5様にしっかりまとめてくれました。近日中に東京、大阪、京都、兵庫の4都府県に緊急事態宣言が発令される公算が高まりました。昨年に引き続き大変残念ではありますが、このGW前後を安心安全にお過ごしください。

2021年5月1日



Effects of Vestibular Rehabilitation on Physical Activity and Subjective Dizziness in Patients With Chronic Peripheral Vestibular Disorders: A Six-Month Randomized Trial

Tomoyuki Shiozaki¹, Taeko Ito¹, Yoshiro Wada¹, Toshiaki Yamanaka¹ and Tadashi Kitahara¹

¹Department of Otolaryngology-Head and Neck Surgery, Nara Medical University, Kashihara, Japan

Introduction: The present study aimed to determine whether supervised vestibular rehabilitation therapy (VRT) by physical therapists (PTs) affects subjective dizziness in patients with chronic vestibular disorders, and whether supervised VRT-induced changes in subjective dizziness are related to the changes in physical activity levels in daily life.

Methods: Patients ($n = 47$) with chronic peripheral vestibular disorders were randomly divided into the VRT group ($n = 25$) and control group ($n = 22$). Patients in the VRT group received weekly supervised visits from PTs for a period of 6 months. Every other month, both groups were advised by neuro-otologists to increase the amount of activity in their daily life. All patients wore an accelerometer device, which recorded their physical activity for seven successive days before the end of the intervention. Patients also completed the dizziness and unsteadiness questionnaires before and after the intervention.

Results: Subjective dizziness decreased significantly regardless of whether supervised VRT was administered; however, dizziness evoked by social activity and head and body movements improved more significantly in the VRT group than in the control group. In the VRT group, there was a significant negative correlation between the increase in sedentary behavior and improvement in subjective dizziness, and a significant positive correlation between the increase in light physical activity and improvement in subjective dizziness at the second month of intervention. The VRT group showed a significantly higher rate of increase in light physical activity than the control group, after 6 months of intervention.

Conclusion: Supervised VRT could be highly effective in treating subjective dizziness in patients with chronic peripheral vestibular disorders. We believe frequent (weekly) and medium-term (6 months) PT-guided interventions may be highly effective in enhancing physical activity in daily life, and may subsequently improve subjective dizziness in these patients.

Trial registration: This clinical study was registered with University Hospital Medical Information Network (identification number: 000028832), <https://www.umin.ac.jp/>

Keywords: vestibular rehabilitation, physical therapist, physical activity, randomized control trial, chronic peripheral vestibular disorders

OPEN ACCESS

Edited by:

Antonio Di Blasio,
University of Ferrara, Italy

Reviewed by:

Levent Lutz,
Hospital de Santa Maria, Portugal
Klaus Jahn,
Stellenbosch Medical Academy, Germany

*Correspondence:

Tomoyuki Shiozaki
shiozaki@naramed-u.ac.jp

Specialty section:

This article was submitted to
Neuro-Otology,
a section of the journal
Frontiers in Neurology

Received: 20 January 2021

Accepted: 20 March 2021

Published: 02 April 2021

Citation:

Shiozaki T, Ito T, Wada Y, Yamanaka T
and Kitahara T (2021) Effects of
Vestibular Rehabilitation on Physical
Activity and Subjective Dizziness in
Patients With Chronic Peripheral
Vestibular Disorders: A Six-Month
Randomized Trial.
Front. Neurology 12:656157.
doi: 10.3389/fneur.2021.656157

RESEARCH ARTICLE

What diagnosis should we make for long-lasting vertiginous sensation after acute peripheral vertigo?

Tomoyuki Shiozaki¹, Masaharu Sakagami¹, Taeko Ito¹, Ichiro Ota¹, Yoshiro Wada¹ and Tadashi Kitahara¹
¹Department of Otolaryngology-Head and Neck Surgery, Nara Medical University, Kashihara, Japan

ABSTRACT
Background: Differential diagnosis of persistent vertigo/dizziness in patients with a past history of vestibular neuritis (VN) and sudden deafness with vertigo (SDV) could sometimes be difficult for physicians due to variable vertiginous symptoms from rotatory to floating sensation.
Objective: The main purpose of the present study was to examine the associations between the findings of otobiovestibulography examinations in patients at the chronic stage after VN and SDV.
Material and methods: We recruited 1789 successive vertiginous/dizziness patients at the Vertigo/Dizziness Center at Nara Medical University between 2014 and 2018. Eighty-five patients were diagnosed as showing VN and 66 showed SDV according to the diagnostic guideline. The VN and SDV patients included 75 and 45 patients with chronic-stage of persistent vertigo/dizziness, of which 55 and 40 were enrolled into the present study.
Results: Persistent vertigo/dizziness after VN was attributable to delayed vestibular compensation (dVC; 33/55; 60.0%), secondary benign paroxysmal positional vertigo (sBPPV; 20/55; 36.4%), and secondary endolymphatic hydrops (sEH; 2/55; 3.6%), while that after SDV was attributable to sBPPV (20/40; 50.0%), dVC (15/40; 37.5%), and sEH (4/40; 10.0%).
Conclusion and significance: The present results could allow to simplify differential diagnosis of persistent vertigo/dizziness after VN and SDV such diseases as dVC, sBPPV, or sEH.

ARTICLE HISTORY
Received 20 June 2020
Revised 10 August 2020
Accepted 14 August 2020

KEYWORDS
Vertigo/dizziness center; vestibular neuritis; sudden deafness with vertigo; delayed vestibular compensation; sBPPV; endolymphatic hydrops

Original Article

Changes in the Results of the Subjective Visual Vertical Test After Endolymphatic Sac Drainage for Intractable Meniere's Disease

Tomoyuki Shiozaki¹, Yoshiro Wada¹, Taeko Ito¹, Toshiaki Yamanaka¹, Tadashi Kitahara¹
¹Department of Otolaryngology-Head and Neck Surgery, Nara Medical University, Kashihara City, Nara, Japan

Cite this article as: Shiozaki T, Wada Y, Ito T, Yamanaka T, Kitahara T. Changes in the results of the subjective visual vertical test after endolymphatic sac drainage for intractable meniere's disease. J Int Adv Otol. 2021; 17(2): 121-126.

OBJECTIVE: To investigate whether function before and after endolymphatic sac drainage (ESD) for Meniere's disease (MD) by using the subjective visual vertical test (SVV) in the upright and tilted positions.
METHODS: Eighteen patients with definite unilateral MD diagnosed in accordance with the American Academy of Otolaryngology-Head and Neck Surgery criteria in 1995 and Jernzy Society criteria in 2011 were included. SVV in the upright position and the head-in position was performed preoperatively and on postoperative days 1, 5, 8, 28 and 112. Changes in the results of SVV in the upright position (UP-SVV) and head-in position (HIP-SVV) after surgery were assessed.
RESULTS: The average UP-SVV values significantly changed from 8.05° to the affected side before surgery to 2.8° to the unaffected side on the fifth postoperative day, followed by recovery to the normal range by the eighth postoperative day. The HIP-SVV values for the unaffected side showed the maximum increase on postoperative day 5 during the present study period, although the values in the affected side did not alter significantly.
CONCLUSION: ESD for MD is a surgical treatment that involves less risk of cochlear function damage and abnormality in gravitational cognition. SVV in the head-in position could be one of the neuro-otologic examinations used to easily understand the vestibular compensatory process.
KEYWORDS: Meniere's disease; endolymphatic sac drainage; otolith function; subjective visual vertical test

耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。奈良医大に赴任して早や7年、めまいセンター開設から早や5年が経ちました。めまいセンターでは、短期入院検査による障害部位の特定および前庭リハの実施というめまい診療のシステム作りを、医師、看護師、言語聴覚士、臨床検査技師、理学療法士が協力して推し進めてきました。このたび塩崎智之助教がその成果をOpenAccessの原著論文

★Shiozaki-T, et al: Effects of vestibular rehabilitation on physical activity and subjective dizziness in patients with chronic peripheral vestibular disorders: A six-month randomized trial.

Front Neurol 12: e656157, 2021.

として報告しました。末梢前庭障害の前庭リハに対する理学療法士の介入効果を、主観的なめまい感と身体活動量の観点から検証した内容です。

塩崎智之助教はこれまでに

★Shiozaki-T, et al: What diagnosis should we make for long-lasting vertiginous sensation after acute peripheral vertigo?

Acta Otolaryngol 140: 1001-1006, 2020.

★Shiozaki-T, et al: Changes in results of subjective visual vertical test after endolymphatic sac drainage for intractable Meniere's disease.

J Int Adv Otol 17: 121-126, 2021.

を報告しており、前庭神経炎、めまい突難、メニエール病に対する前庭リハ効果について、今後も精力的に検討していく予定です。



2021年5月6日



★耳鼻咽喉・頭頸部外科外来リニューアル！★

おはようございます。

この度、GW期間を利用して当科外来エリアを全面改修、リニューアルいたしました！

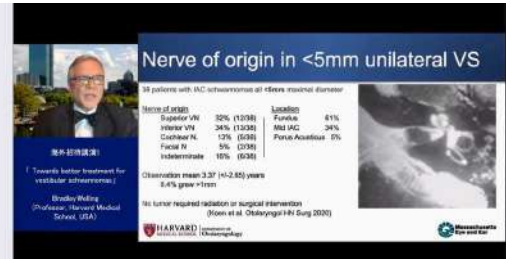
患者さんが安心して過ごして頂け、私たち医療従事者にとっても安全に診療できるように、感染対策も十分に考慮した設計になっております。

これからもより良い診療を提供できるように、日々改善して参ります。

どうぞよろしく願いいたします。



2021年5月15日



今年の第122回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会(大森孝一会長)は、予定通りの会期(5月13日木曜-15日土曜)で、国立京都国際会館にて開催されました。新型コロナの影響を受け、現地とリモートのハイブリッド開催、とくに特別講演等は当日ライブ配信に加え、後日オンデマンド配信が準備されるとのことです。京都大学の関係者の皆様方に感謝申し上げます。

当科関連からの特別講演等は、西村忠己講師の「日本発の新規医療：軟骨伝導補聴器」、北原の「めまいの診断と治療：手術治療」をお届けさせていただきました。ノーベル賞受賞者である山中伸弥先生の「iPS細胞研究の現状と医療応用に向けた取り組み」、本庶 佑先生の「がん免疫治療の新展開」、北大から京大に移られた8割おじさんこと西浦 博先生の「新型コロナウイルスの感染経路とリスクのモデル化」など、興味深い特別講演を身内でオーガナイズできる京大はさすがに層が厚いと感じられました。当科留学生の受け入れで大変お世話になっているHarvard UniversityのBradley Welling先生もお元気そうで何よりでした。

来年の第123回は神戸国際会議場(丹生健一会長)で予定されています。是非とも、対面がメインとなるような通常開催となることを祈念いたします。



2021年5月22日

こんばんは、耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原仮面です。久しぶりの登場です。先週は日耳鼻総会が開催され、今回アップが遅くなりました。金曜午後は5回生・1週ポリクリ総括でした。感染対策もしっかりと守りつつの対面実習となりました。総括は「外耳道狭窄症について」を皆さんにしっかりまとめてくれました。今年は例年よりも早い梅雨入りでおうち時間が多くなりますが、緊急事態宣言中としては好都合とポジティブに考えて、おうちで安全安心にお過ごしください。



2021年5月25日

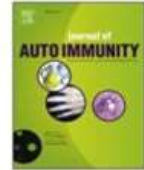
Journal of Autoimmunity 121 (2021) 102664



Contents lists available at ScienceDirect

Journal of Autoimmunity

journal homepage: www.elsevier.com/locate/jautimm



Long-term (16–26 years) follow-up outcome of steroid therapy in refractory autoimmune sensorineural hearing loss

Tadashi Nishimura^{a, *}, Tadao Okayasu^a, Hiroshi Hosoi^b, Tadashi Kitahara^a

^a Department of Otolaryngology-Head and Neck Surgery, Nara Medical University, 840 Shijo-cho, Kashihara, Nara, 634-8522, Japan

^b MBT (Medicine-Based Town) Institute, Nara Medical University, 840 Shijo-cho, Kashihara, Nara, 634-8522, Japan

ARTICLE INFO

Keywords:

Autoimmune sensorineural hearing loss
Autoimmune inner ear disease
Autoimmune disease
Steroid therapy
Long-term follow-up
Audiometric test

ABSTRACT

Autoimmune sensorineural hearing loss (ASHL) is a rare disease of uncertain etiology, with no established treatment strategy. The duration of morbidity is increased in refractory cases; and therefore, the preservation of hearing and the prevention of adverse effects with steroid therapy are serious long term issues to consider. Long-term follow up of patients treated for ASHL was performed retrospectively in order to elucidate the pathogenesis of ASHL, evaluate the consequences of steroid therapy, and determine a promising treatment course. The cohort in this study consists of four female patients with refractory ASHL that were followed for 16–26 years. Three patients already had profound deafness on one side, probably due to ASHL, before the initiation of steroid treatment. ASHL was managed with steroid administration and the hearing was evaluated through regular audiometric tests (173–212 times). The relationship between pure tone threshold average and steroid dose was reviewed over a long-term follow-up period for each patient. During follow-up, hearing deficit progressed rapidly several times in all patients, as did responsiveness to steroid therapy. Long-term high-dose steroid therapy was not required for hearing maintenance. Hearing thresholds were nearly maintained in three patients during the 16- to 21- year follow-up, and gradually declined over a 26-year follow-up period in one patient. Considering the progress due to presbycusis, the maintenance of hearing was considered sufficient in all patients. No serious adverse effects were observed in any of the patients. Management of patients affected by ASHL with regular audiometry allowed for hearing maintenance without the morbidity of prolonged steroid therapy. The current observations give insight into the pathogenesis of ASHL pathogenesis and establish an efficient course of treatment.

ステロイド依存性感音難聴はそれほど頻繁に出会う疾患ではありませんが、治療に難渋することが多く、お困りになられた経験のある耳鼻咽喉科の先生方もおられるのではないのでしょうか。このたび当科・西村忠己講師は、自身の外来で長期follow-upしてきた症例の結果をまとめ、Journal of Autoimmunity誌(IF6.658)に掲載されました。症例数は4例ですが、疾患そのものが稀で不明な点も多く、そして何より16-26年間という長期間(過去の報告は10年程度)のステロイド投与量と聴力経過をまとめたことが評価されました。その間に実施した聴力検査数は1例あたり173-212回で、結果に応じて投与量を調整してきました。継続は力なりというコトワザがありますが、患者さんの聴力を長期間維持することができ、このような評価につながったと考えます。ご興味のある先生方は https://authors.elsevier.com/a/1d7bl_KP4rfChe から、しばらくの間無料ダウンロードでご覧いただけます。



2021年5月28日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。各地で「緊急事態宣言」、「まん延防止等重点措置」の解除延期が決定される中、引き続き新型コロナに注意を払いつつ、対面での5回生1週ポリクリ総括+めまいクルズをさせていただきました。総括は「中咽頭癌多発例」という難しい症例の診断・治療について、5人5様にしっかりまとめてくれました。本日、私が手術しためまい患者様から、無事飛行業務に勤んでいるという報告を受けました。患者様の今後の体調管理についても責任が発生することを承知しておりますが、諦めるのではなく前に進む手助けができたことを嬉しく思います。今年は記録的な早さで5月中旬に梅雨入りしましたが、その5月もあと数日で終わろうとしています。なかなか自由に動けない週末ですが、安心・安全にお過ごしください。



2021年6月11日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。来週は日本頭頸部癌学会@東京、再来週の耳鼻咽喉科臨床学会@北海道が予定されており、各地に出された「緊急事態宣言」、「まん延防止等重点措置」が今後どうなるのか気になるところです。本日金曜午後は、対面での5回生1週ポリクリ総括+めまいクルズスをさせていただきました。総括は術前に「頸動脈小体腫瘍」と思われたが、術中に「神経原性腫瘍」であるとわかった、比較的稀な副咽頭間隙腫瘍について、その由来神経を含めた診断・治療の考察を、5人5様にしっかりまとめてくれました。6月とは思えない暑さが続きますが、安心・安全・快適な週末をお過ごしください。



2021年6月11日



2021/06/11(19:00-20:00)의 韓國耳科學會(KOS)web seminarで、日本のメニエール病に関する診療ガイドラインを、北原がlectureさせていただきました。韓国との共通認識もあれば異なる意見もあり、非常に勉強になるdiscussionでした。韓国耳科學會(KOS)のメンバーには厚く御礼申し上げます。



2021年6月15日



Department of Otolaryngology-
Head and Neck Surgery,
Nara Medical University

耳鼻咽喉・頭頸部外科 医局説明会



外来診療



手術



2021.7.14 (水) 19:00～開始
耳鼻咽喉・頭頸部外科医局 (3F)
web参加も可能です! (webご希望の方は前日までにご連絡ください)
Tel : 0744-22-3051
内線3435 (耳鼻科医局)
ローテートや見学もお待ちしてます!! (担当: 山下まで)

本年度の医局説明会を2021年7月14日(水) 19:00から医局において開催させていただきます。対象は初期研修医・医学生となっておりますが、後期研修医や奈良医大耳鼻咽喉科と一緒に働きたいと考えている先生方も大歓迎です。参加希望の方は耳鼻科医局(内線3435)にご連絡いただければ幸いです。なお、遠方の方でwebでの参加をご希望される方は前日まで耳鼻咽喉科医局までご連絡お願いいたします。(担当: 山下)



2021年6月18日



☆学会報告☆

2021/06/17-18 第45回日本頭頸部癌学会がTDL傍のグランドニッコー東京ベイ舞浜で開催！当教室からは7名が発表しました。上村裕和准教授が教育講演&、太田一郎講師が一般口演&座長、秋岡宏志医員、足立詩織医員、岩倉真也医師(市立奈良病院)が一般口演、木村隆浩助教と田中英久医員がポスター発表を行いました。ハイブリッド形式で関係者が全員集まることはできませんでしたが、内容はとても充実したものでした。全部見切れないので後日オンデマンドでゆっくり見られるのはハイブリッドの良いところです。このシステムは今後、全面解禁になっても継続する方が参加者は増えるかも知れません。コロナ禍の中、安全に学会運営を行なって頂いた大会主催の菅澤 正先生をはじめとする埼玉医大国際医療センターの皆様、学会運営関係者の皆様には深謝申し上げます。TDL入場は叶いませんでしたが、雰囲気だけは楽しみました。



2021年6月23日

現在、静岡がんセンターに国内留学中の西村です。

原著論文 "Incurable locoregional disease is a strong poor prognostic factor in recurrent or metastatic squamous cell carcinoma of the head and neck" がInternational Journal of Clinical OncologyにPublishされました。

この論文では再発転移頭頸部扁平上皮癌において、局所と頸部リンパ節病変の存在が予後不良因子であることを示すことができました。

静岡がんセンター消化器内科で、がん薬物療法のトレーニングでお世話になって1年目を終え、頭頸部癌に関する臨床研究をまず一つ形にできました。

横田先生はじめ、共著者、消化器内科の先生方、ご指導いただき、ありがとうございました。今後とも引き続きのご指導よろしくお願い申し上げます。

<https://link.springer.com/article/10.1007/s10147-021-01965-1>



2021年6月24日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。この週末は耳鼻咽喉科臨床学会@北海道が予定されていますので、本日本曜午後に対面での5回生1週ポリクリ総括+めまいクルズスをさせていただきました。総括は「右舌扁桃溝原発でp16(-)の中咽頭癌」について、その診断・治療のポイントを5人5様にしっかりまとめてくれました。各地に出された「緊急事態宣言」は「まん延防止等重点措置」に移行となり、いよいよ1ヶ月後の東京五輪に向けての最終調整が加速化されていくものと思われます。ウガンダ選手団の今後も気になりますが、オリンピック開会後にチームに陽性者、濃厚接触者が出たときの対応など、金メダルの思惑に左右されない厳格なルールの下で運営していただきたく思います。それでは皆様、安心・安全・快適な週末をお迎えください。



2021年6月27日



第83回耳鼻咽喉科臨床学会が、2021年6月25日土曜26日日曜にかけて、北海道札幌市ロイトン札幌で開催されています。COVID-19対策として、会場を第一第二にしぼり、一般演題をすべてweb配信とされました。主催された北海道大学の先生方は大変ご苦労されたことと思います。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

学会初日シンポジウムの『耳鼻咽喉科におけるリハビリテーション』では、当科から伊藤妙子診療助教が『めまいに対する前庭リハビリテーション』を発表しました。

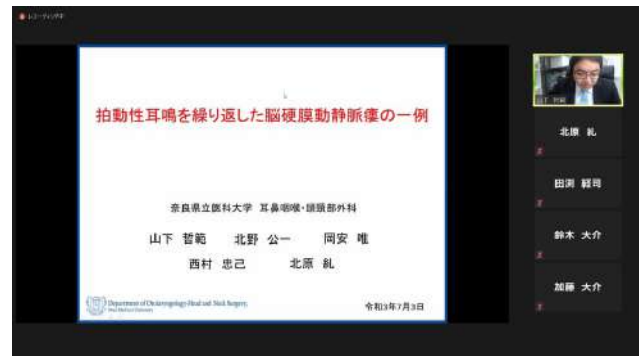
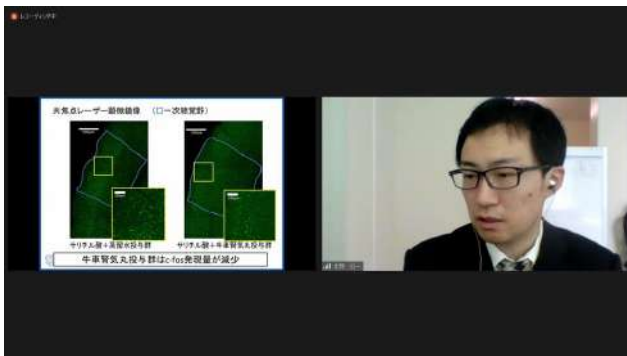


2021年7月3日

第6回 耳鳴・難聴研究会

令和3年7月3日 (土) 10:00より

担当事務局
名古屋大学耳鼻咽喉科学教室
TEL : 052-744-2323
E-mail : jimei2020@outlook.jp



本日、第6回耳鳴・難聴研究会が名古屋大学耳鼻咽喉科主催にて、完全Web方式で開催されました。北原教授の座長セッションから始まり、当科からは山下学内講師の拍動性耳鳴の症例報告、昼からは北野大学院生がラット耳鳴モデルを用いた漢方薬投与実験につき報告いたしました。

特に耳鳴に対する動物行動実験は、現在耳鳴治療に使用されている薬の評価だけでなく、新薬の開発に向けても避けては通れないものでありますが、日本ではあまり行われておらず、座長の先生からも今後の発展を期待していただきました。



2021年7月4日



MOLECULAR AND CLINICAL ONCOLOGY 15: 158, 2021

Anaplastic thyroid cancer with long-term survival with lenvatinib therapy and preservation of laryngeal function after one-stage reconstruction: A case report

AKIHISA TANAKA¹, HIROKAZU UEMURA¹, TAKASHI MASUI¹,
SHIGENORI KANAZAWA², YUMI YOSHII³, MASATOSHI KANNO³, GOHEI MORITA⁴,
CHIHO OBAYASHI⁴, TOSHIAKI YAMANAKA¹ and TADASHI KITAHARA¹

¹Department of Otolaryngology-Head and Neck Surgery, Nara Medical University, Kashihara, Nara 634-8522;

²Department of Otorhinolaryngology-Head and Neck Surgery, Nippon Life Hospital, Osaka-city,

Osaka 550-0006; Departments of ³Cancer Genomics and Medical Oncology and

⁴Diagnostic Pathology, Nara Medical University, Kashihara, Nara 634-8522, Japan

Received February 26, 2021; Accepted May 27, 2021

DOI: 10.3892/mco.2021.2320

MOLECULAR AND CLINICAL ONCOLOGY 15: 180, 2021

A study of 24 cases of salivary gland carcinoma with distant metastasis

TAKASHI MASUI¹, HIROKAZU UEMURA¹, ICHIRO OTA¹, TAKAHIRO KIMURA¹,
DAISUKE NISHIKAWA², TOSHIAKI YAMANAKA¹, KATSUNARI YANE² and TADASHI KITAHARA¹

¹Department of Otolaryngology-Head and Neck Surgery, Nara Medical University, Kashihara, Nara 634-8522;

²Department of Otolaryngology, Kindai University School of Medicine, Nara Hospital, Ikoma, Nara 630-0293, Japan

Received March 5, 2021; Accepted May 26, 2021

DOI: 10.3892/mco.2021.2345

当科の腫瘍グループも精力的に頑張っています。
田中瑛久医員、榊井貴史助教によるアベック報告です。

タイトル：Anaplastic thyroid cancer with long-term survival with lenvatinib therapy and preservation of laryngeal function after one-stage reconstruction: A case report

内容：喉頭への浸潤を伴う局所進行甲状腺乳頭癌に対して、甲状腺全摘術、喉頭左側半切除術、頸部郭清術、遊離前外側大腿皮弁・遊離肋軟骨を用いた喉頭再建術を行った症例。

術後病理結果で甲状腺乳頭癌の中に一部甲状腺未分化癌が混在しており、術後2か月目のPET-CTで後頸部に早期再発を疑う集積を認めたため、レンバチニブ療法を開始した。レンバチニブ療法は奏功し、術後26か月時点で再発病巣は消失し、新規再発も認めていない。



今回の再建術式は、喉頭の欠損部を補う方法として非常に有用だけでなく、遊離肋軟骨を前外側大腿皮弁の真皮下に置くことにより、呼吸による圧変動などに対しても有利に働く。結果、術後の患者様の呼吸、発声、嚥下などの機能低下を最小限にすることができた。再建材料としていくつかの方法がこれまで提示されているが、前外側大腿皮弁、肋軟骨ともに日常の服装で隠れる部位であることも利点の一つ。術後の気管孔も自然閉鎖することができ、患者様のQOLを大きく低下させない手術をすることができた。

タイトル：A study of 24 cases of salivary gland carcinoma with distant metastasis.

内容：当科における遠隔転移を来した唾液腺癌24例について検討した。遠隔転移を来した唾液腺癌の予後は不良であり、病理組織型も多彩であることから、確立された治療法もなく難渋することが多い。

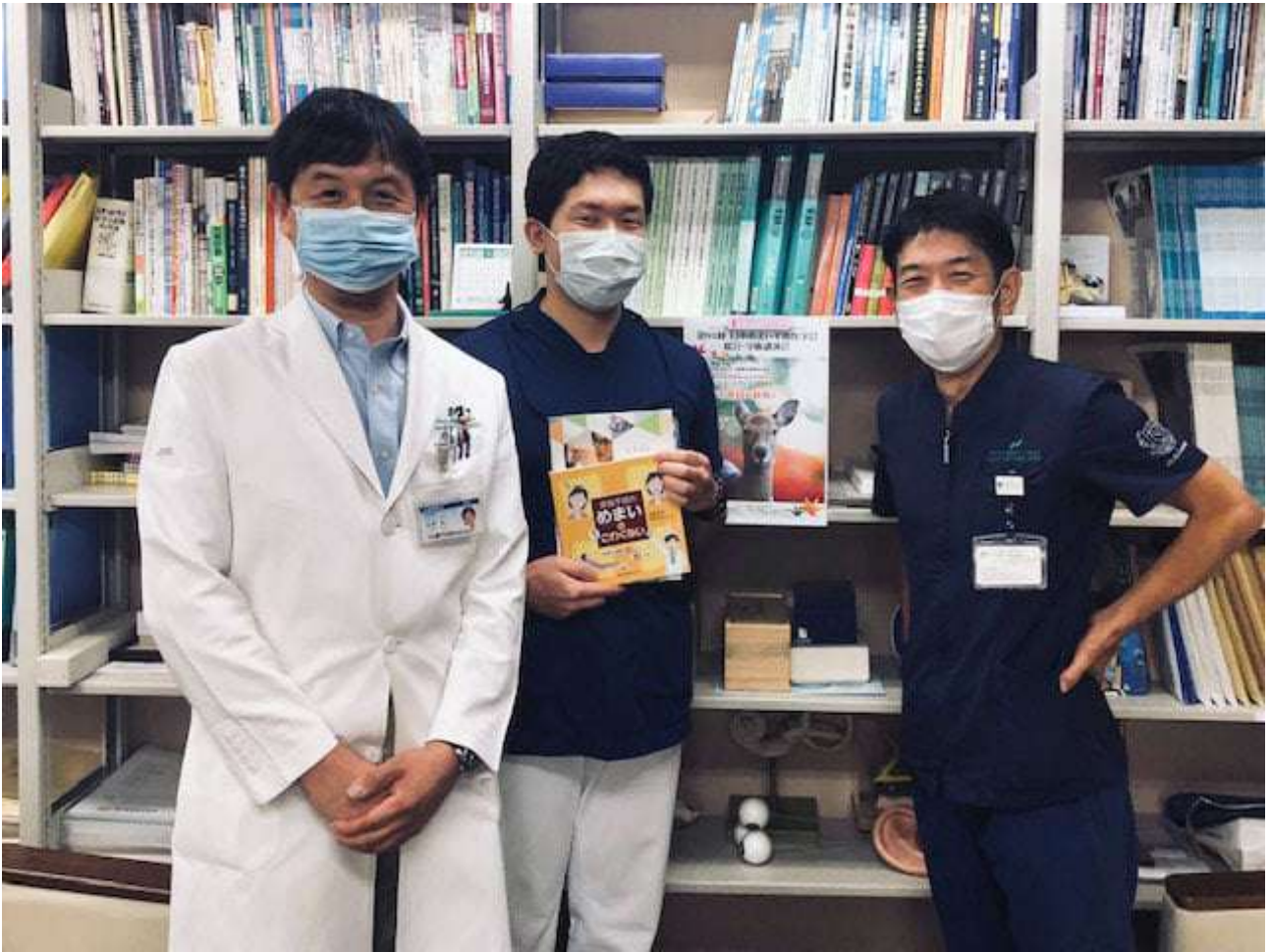
今回の検討では、遠隔転移出現後の5年生存率は43.5%、10年生存率は14.5%。5年生存率に関して、遠隔転移出現後の頭頸部癌としては決して低くない数字である。ただ10年生存率は14.5%と低く、唾液腺癌の特徴をよく表している。長期経過観察が必要。

性別、年齢、発生部位、転移臓器数、病期、転移巣切除可否別による生存率の違いを検討したが、有意な予後因子は認められなかった。これは遠隔転移を来した時点で、転移臓器数やそれまでの病期などに関係なく一様の予後をたどることを意味する。言い換えると、たとえ複数個の臓器に転移していても、もともとのstageがIVであっても、治療次第で長期予後が見込める可能性がある。唯一、転移巣切除できた症例は切除不能例に比べ、生存期間の延長が認められる傾向にあった。つまり遠隔転移巣であっても、切除可能な症例は、可能な限り切除をするべきなのかも知れない。

これまでに遠隔転移症例に絞って検討した報告はほとんどなく、貴重な報告ができた。予後については比較的詳細な検討ができたが、治療法については検討できなかった。今後、症例数を増やしての再検討、治療法の統一化が課題である。



2021年7月7日



本日は非常に嬉しいお知らせがあります。一昨年、昨年と当科への入局が厳しい状況であった中で、本学で初期研修中の景山 魁先生が、先ほど私達の仲間入りを表明。来週の医局説明会を待たずして、早々に決断してくれました。初期研修期間残りの半年余りをしっかり頑張ってください、その後は将来の当科を担ってくれる人材として大切に育てていきたいと思います。



2021年7月9日



第16回 日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会がリーガロイヤルホテル大阪で7月8日、9日と現地+Webハイブリットで開催されています。大変な中、主宰された近畿大学と近畿大学奈良病院の先生方には深謝いたします。

森本診療助教と市立奈良病院から大塚医員が参加しています。「当院における小児難聴例に対する遺伝カウンセリング」、「WFS1遺伝子変異による進行性難聴を認めた2症例」の遺伝性難聴2件を報告し、活発な議論が行われました。会場参加の先生方も予想より多く、学会らしい雰囲気を取り戻しつつあります。



2021年7月9日

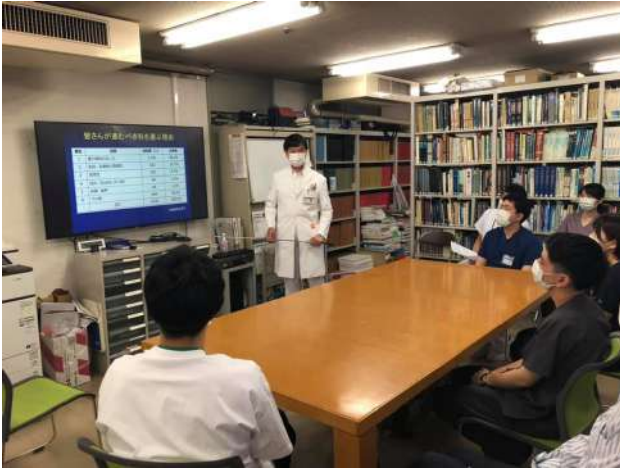


耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。本日金曜午後は夏休み前最後の、5回生のための1週ポリクリ総括+めまいクルズスでした。総括は久々に耳疾患である「耳硬化症」にフォーカスを当てましたが、診断と治療のポイントについて5人5様にしっかりまとめてくれました。めまいクルズスには今回からBPPV頭位治療のための教育教材「ひでお君」が強力な助っ人として参加。眼振までは出ませんのでYouTube動画と合わせて教えていきたいと思います。

東京五輪は「緊急事態宣言」と「まん延防止等重点措置」で何とか乗り切ろうということでしょうか。いよいよ2週間後に開幕ですね。雰囲気にならず、安心・安全・快適な週末をお迎えください。



2021年7月14日



本日、奈良県立医科大学耳鼻咽喉・頭頸部外科学講座の医局説明会を開催させていただきました。COVID-19感染対拡大防止対策のため、医局員の参加も最小限にさせていただき、例年行ってきた懇親会は今年も中止とさせていただきました。密をさけ、短時間での開催となりましたが、初期研修の先生方計4名の先生に参加いただきました。今後も随時研修、見学、入局相談等を行わせていただきます。お気軽にお問い合わせいただければ幸いです。



2021年7月25日



今年も骨解剖実習が7月21日に解剖実習室で行われました。今回は奈良県総合医療センター、日本生命病院、ベルランド総合病院、岸和田市民病院の後期研修医の先生方も含め多くの先生方に参加いただき、手術顕微鏡下に実習を行いました。耳科手術指導医の先生方に直接指導を受けながら、側頭骨深部の解剖に触れることができ、貴重な実習となりました。来週7月28日は18時から関連病院の先生方にも集まっていたいただき、鼻科手術の解剖実習を行います。実習期間は来月初めまでまだまだ続きますので、オリンピックの開幕で選手の活躍から目が離せませんが、こちらからも目が離せません。実施に際しまして、第一解剖学、第二解剖学、脳神経外科学教室の先生方には大変お世話になり、この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。



2021年8月8日

Allergy Forum in NARA

日時 2021年8月7日(土) 17:00~18:30

会場 ホテル日航奈良「百合」の間

議長 奈良県立医科大学 呼吸器内科学講座 助教 藤田 幸男 先生

講演 I 17:00~17:20
「スコアリングシステムを生かしたアトピー性皮膚炎の治療戦略」

演者 奈良県立医科大学 皮膚科学講座 准教授 新熊 悟 先生

講演 II 17:20~17:40
「治療に難渋する好酸球性副鼻腔炎への対応」

演者 奈良県立医科大学 耳鼻咽喉・頭頸部外科学講座 学内講師 山下 哲範 先生

講演 III 17:40~18:00
「気管支喘息におけるtype 2 炎症の病態と治療戦略」

演者 奈良県立医科大学 呼吸器内科学講座 助教 藤田 幸男 先生

討論 18:00~18:30
「アレルギー疾患のトータルケアを考える」

司会 奈良県立医科大学 呼吸器内科学講座 助教 藤田 幸男 先生

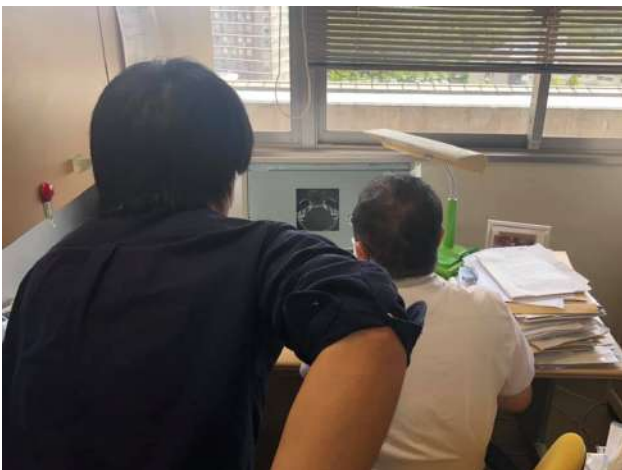
主催：サノフィ株式会社 SANOFI GENZYME



昨日、第1回Allergy Forum in NARAが完全Web方式で開催されました。呼吸器内科、耳鼻咽喉科、皮膚科の合同Forumで、当科からは山下学内講師が、「治療に難渋する好酸球性副鼻腔炎への対応」につき講演いたしました。アレルギーの分野においては、新しい生物学的製剤が次々と承認され、他科との連携が重要になっており、奈良医大でもスムーズに他科連携できる体制を構築するために活発な意見交換を行いました。



2021年8月18日



本日は大阪大学との共同研究ミーティングのため、吹田キャンパスに行って来ました。
奈良医大からは大学院の植田景太先生が中心となり、大阪大学准教授の今井貴夫先生にご協力いただき、全国のみまい患者数を半減させるという魅力的なプロジェクトを推し進めます。

2021年8月21日

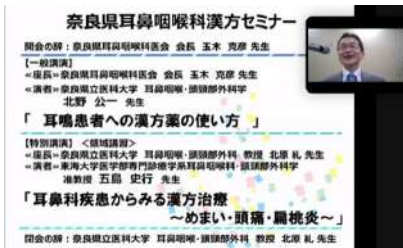


10:00	開会式	
10:05	一般演題 第1群～第2群	
11:25		
11:30	特別講演 I	登録席 ウェビナー
12:30		
13:30	一般演題 第3群～第5群	
16:20		
16:30	特別講演 II	登録席 ウェビナー
17:30		
17:40	イブニングセミナー	登録席 ウェビナー
18:40	閉会式	
18:45		

本日、第38回耳鼻咽喉科ニューロサイエンス研究会が、秋田大学耳鼻咽喉科の主催にて開催されました。北原の第1群・座長セッションで始まり、当科から「原因不明のめまい症として紹介された症例の結果と考察」、「めまい難聴を繰り返す疾患と内耳造影MRIによる内リンパ水腫陽性率」を報告しました。本研究会は毎年、グランビア大阪で開催されることになっていますが、今回は完全Web開催になりましたので史上初、秋田県にぎわい交流館AU(あう)に開催本部が置かれました。山田武千代会長をはじめ、秋田大学耳鼻咽喉科医局の先生方には厚く御礼申し上げます。



2021年8月29日



本日8月28日土曜、奈良県耳鼻咽喉

科漢方セミナーが開催されました。新型コロナウイルス第5波の影響を考慮して、ホテル日航奈良スタジオからのweb開催とさせていただきました。

一般講演は当科の北野公一先生に「耳鳴患者への漢方薬の使い方~耳鳴動物モデル研究も交えて~」、特別講演は東海大学医学部耳鼻咽喉科・頭頸部外科の五島史行准教授に「耳鼻科疾患からみる漢方治療~めまい・頭痛・扁桃炎~」をご講演いただきました。

漢方伝来の地である奈良県において、今後も基礎と臨床の両面から漢方治療のエビデンスを深めていくことができれば幸いです。

来年は通常形式で開催できることを期待します。

2021年9月3日



第34回 日本口腔・咽頭科学会総会・学術講演会が、9月2日木曜-3日金曜に、ナレッジキャピタルコングレ
コンベンションセンター@グランフロント大阪で、現地+WEBのハイブリット開催されました。緊急事態宣
言下での開催には、大変なご苦勞を要されたとお察しいたします。主宰された関西医科大学 耳鼻咽喉科・頭
頸部外科の岩井 大会長および医局員の先生方には深謝いたします。

奈良医大関連からは、大阪ボイスセンター、奈良医大・非常勤講師としてもお世話になっている望月隆一先
生が、初日に一般演題「扁桃摘出で声が変わるか」とパネル「のどのアンチエイジング」で発表されました。ま
た大阪回生病院・部長の芝埜 彰先生が、2日目に一般演題「OSAS治療前後のQOL」を発表されました。
一方、これから専門医を目指す若手からも、初日に秋岡宏志先生が「舌K・中咽頭K術後の嚥下機能」、田
中瑛久先生が「中・下咽頭Kに対する低用量シスプラチン併用化学放射線治療」、衛藤克幸先生が「化学焼
灼後に再発外科治療となった梨状陥凹瘻」、2日目に執行雅之先生が「当科・咽頭異物491例」を発表しま
した。

口腔・咽頭は人がより豊かに生きていく上で重要領域であり、耳鼻咽喉科医が医師として責任持って担当す
べき重要領域です。これからより一層、力を入れて取り組んでいきたいと考えます。



2021年9月4日



特別講演 I【共通講習(感染対策)】

18:05 ~ 19:05

座長: 大阪回生病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科

部長 藤田 信哉 先生

「日常臨床で気をつけたい感染症の基本」

札幌医科大学医学部 耳鼻咽喉科学講座

教授 高野 賢一 先生

情報提供

19:05 ~ 19:15

新規キノロン系抗菌薬 ラスピック錠75mgについて 杏林製薬株

特別講演 II【領域講習】

19:15 ~ 20:15

座長: 大阪市立大学大学院医学研究科 耳鼻咽喉病態学 教授 角南 貴司子 先生

「メニエール病の基礎と臨床」

神戸大学医学部 耳鼻咽喉科学講座

特命教授 柿木 章伸 先生



本日は第5回奈良-大阪めまい研究会改め耳鼻咽喉科研究会がシェラトン都ホテル上本町でweb開催されました。200名以上の先生方に登録、視聴いただきました。

今回は大阪回生病院の担当で、札幌医大・高野賢一教授に「共通講習：日常臨床で気をつけたい感染症の基本」、神戸大学・柿木章伸教授に「領域講習：メニエール病の基礎と臨床」を講演いただきました。

来年は従来通りの形式で、奈良市JWマリオットでの開催を考えています。



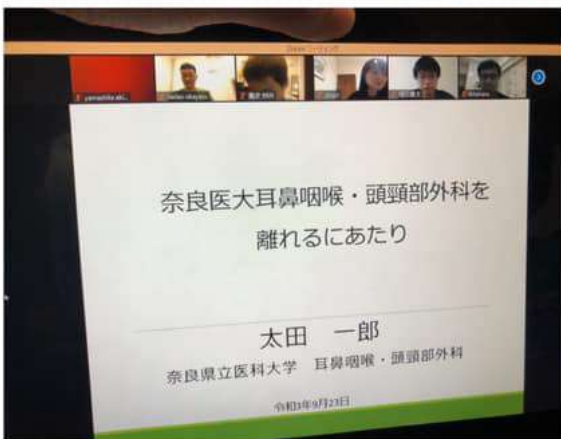
2021年9月10日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。本日金曜午後は夏休み明け最初の、5回生のための1週ポリクリ総括+めまいクルズスでした。総括では「KKKに対する喉頭全摘術」について、5人5様にしっかりまとめてくれました。喉摘すると当然、その日から声は出なくなります。先日ある民放番組で、前もって自分の声を収録しておく、喉摘後もスマホやPCから簡単な文字入力で自分の声の音声合成が利用できる「声フォント」なるAI技術が紹介されていました。今後はさらに文字入力しなくても自分の声を利用できるようになるだろうし、こういった素晴らしいAI技術が医療各分野に次々に導入されていくものと思われま。めまいクルズスでは総診や救急でも必要となる「BPPVに対する浮遊耳石置換法」を、めまい教育教材「ひでお君」を用いて安心・安全に実習してもらいました。東京五輪は「緊急事態宣言」と「まん延防止等重点措置」の発出される中、オリ・パラすべての日程を終了しました。東京五輪に対する評価は、様々な見方がある中で簡単に述べることはできないであろうし、一定の時間経過も必要だと考えます。さて、これと言って何も無い週末ですが、大谷選手の44号と10勝を期待しつつ。安心・安全・快適な週末をお迎えください。



2021年9月23日



9月末日を持ちまして、長年、奈良県立医科大学耳鼻咽喉・頭頸部外科の臨床、研究、教育を引っ張っていただいた太田一郎講師が退職され、近畿大学奈良病院に赴任されることになりました。医局としては初めての試みですが、オンラインで送別会を行いました。上村先生をはじめ多数の医局員が、これまでの太田先生との思い出を、遠くはサンフランシスコから披露しました。最後に、太田先生からこれまでの経験からの熱い思いを聞かせていただきました。今までと変わらないご活躍を祈念し、また新しい目線からのご指導をお願いしたいと思います。



2021年9月24日



第60回日本鼻科学会が、大津市民会館および琵琶湖ホテルにて開催されています。奈良医大関連からは、奈良県総合医療センターの成尾一彦先生、阪上 剛先生が参加発表します。

ハイブリッド開催ではありますが祝日も絡んだ日程のため、診療所の先生方の現地参加が多数あり第五波収束の兆しを感じました。勿論、引き続き注意深く行動する必要があります。



2021年9月24日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。本日金曜午後は5回生のための1週ポリクリ総括+めまいクルズスでした。総括では「OKKに対する診断と治療」について。過去に動注療法と放射線治療の同時併用療法を行いつつ、さらにフォロー中のPET-CTにより上顎全摘+頸部郭清となった経緯を、5人5様にしっかりまとめてくれました。めまいクルズスは総診や救急でも必要となる「めまい救急トリアージ」と「BPPVに対する浮遊耳石置換法」の2本立てで進めました。わかりやすいYouTube動画を供覧しながら、めまい教育教材「ひでお君」を用いての実習は好評です。来月から早くも今年度後半戦のスタート。良い週末をお迎えください。



2021年10月8日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。金曜午後は5回生の1週ポリクリ総括のお時間ですが、本日は近畿大学奈良病院から家根旦有教授をお招きして「頭頸部がんとHPV」を勉強してもらいました。ウイルス感染による発がんは興味深く、新型コロナで注目されているワクチンの話題と相まって、家根教授の蕩々と語るクルズスは好評でした。お忙しい中、出張いただきありがとうございました。その後はいつも通り、総括と「めまい救急トリアージ」。総括は「両側高度感音難聴に対する人工内耳埋込術」。5人5様にまとめてくれました。緊急事態宣言は明けておりますが、引き続き安心・安全な週末をお迎えください。月曜はお休みではございません。お間違えなきよう。



2021年10月9日

第36回

日本耳鼻咽喉科漢方研究会 学術集会講演要旨集

日本耳鼻咽喉科漢方研究会の未来に向かって
～エキスパートを育てる～

日時 2021年10月9日(土)

形式 Web開催

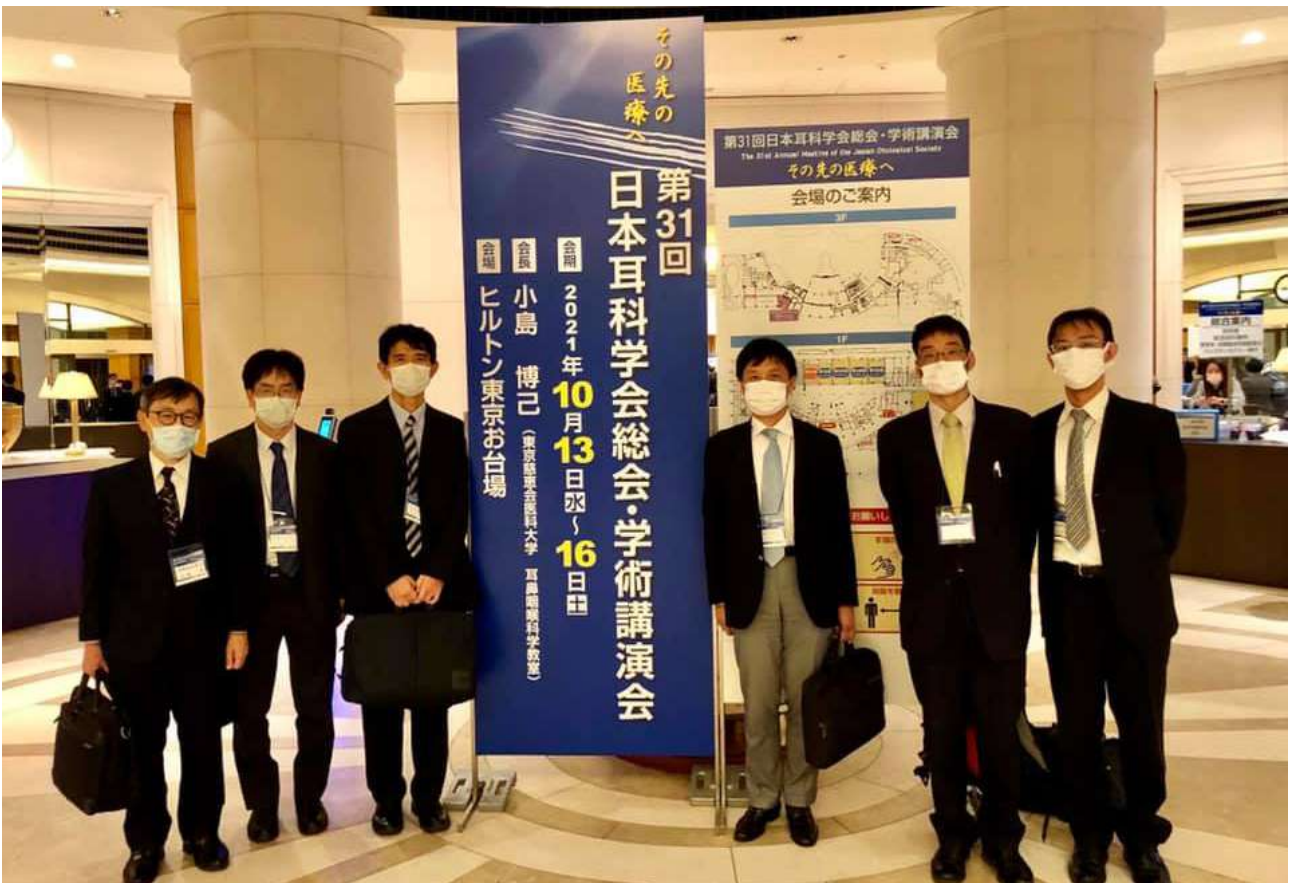
会長 小川 郁 (慶應義塾大学 名誉教授)



昨年は新型コロナの影響で中止となり、2年振りの第36回日本耳鼻咽喉科漢方研究会が、本日2021年10月9日(土)に東京コンファレンスセンター品川にて開催されました。今回は「日本耳鼻咽喉科漢方研究会の未来に向かって～エキスパートを育てる～」と題して、慶應義塾大学をご退官された小川 郁名誉教授が会長をされました。

当科からは北野公一医員が「ラット耳鳴モデルを使用した牛車腎気丸の作用機序の検討」について、本会唯一の基礎演題を発表しました。耳鳴動物モデルの確立はなかなか難しい仕事ですが、逃避行動実験を用いた動物行動学的な検討のみならず、最初期遺伝子c-fosを用いた形態学的な検討を加えたところに今後の可能性を期待します。

2021年10月15日



2021年10月13日(水)～16日(土)まで、慈恵会医科大学主催の第31回日本耳科学会@ヒルトン東京お台場が、新型コロナ第五波収束傾向の中、しかし慎重な感染対策の下で開催されています。天気はとても良く、青空が広がっていますが、フジテレビ周辺は静かな雰囲気です。

一方、学会場には現地に赴く会員の先生方も多く、活気づいている印象を受けました。当科および関連病院からは昨年と同様、教育講演、シンポジウム、一般口演、eポスター等、合計10題の演題を持って参加しています。



2021年10月22日



2021年10月20日～22日の日程で、第66回聴覚医学会総会・学術講演会が東京の上條記念館で開催されています。昨年同様、会場とWEBのハイブリッド開催で行われました。

当院の細井学長と西村講師は補聴演題の座長を務めました。また当科および関連施設から以下の7つの演題を発表しました。

- ・西村忠己講師「軟骨伝導補聴器市販化後調査(4)—各群での購入に影響した要因—
- ・岡安 唯助教「骨導超音波語音の母音の刺激長と語音弁別の関係」
- ・森本千裕診療助教「当院における難聴の遺伝カウンセリングの現状」
- ・斎藤修言語聴覚士「聞こえに対するマスクの影響の主観的評価」
- ・赤坂咲恵先生（済生会中和病院 耳鼻咽喉科）「語音明瞭度別の異聴傾向と有効継続時間（ τ_e ）」
- ・大塚進太郎先生（市立奈良病院 耳鼻いんこう科）「メニエール病各実例における語音明瞭度曲線のRollover現象についての検討」
- ・下倉良太准教授（大阪大学 基礎工学研究科）「明瞭度改善を目的とした単音節初期エネルギー急峻化信号処理」

現地はあいにくの雨模様でしたが会場では活発な議論が行われました。主催くださった昭和大学医学部耳鼻咽喉科学講座と関係者の皆様に深く御礼申し上げます。



2021年10月22日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。本日金曜午後は5回生のための1週ポリクリ総括+めまいクルズでした。総括では「顎下腺・腺様嚢胞K」について、診断までの流れ、治療の選択肢など、5人5様にしっかりまとめてくれました。

ところで、ストレスから発症する病気は耳鼻咽喉科の中にも多々ありますが、メニエール病もその一つと考えられています。しかし、ストレスでメニエール病が発症するということで思考を止めてしまうと、いつもまでたっても患者さんに「ストレスのないゆったりとした生活をしなさい」という非現実的なアドバイスしかできません。ストレスホルモンで内リンパ水腫が発生するメカニズムに目を向けると「ストレスホルモンを何とかすればメニエール病を回避できるかも知れません」という現実的アドバイスができます。そんな論文が加我君孝先生ご編集のFrontier Neurology 12: e656157, 2021に「Endolymphatic sac decompression surgery and plasma stress hormone vasopressin in Meniere's disease」として掲載されました。Open Accessですので自由にご覧ください。

少し肌寒い季節になってきました。普通の風邪にも気をつけながら、良い週末をお過ごしください。



2021年10月30日



第92回奈良県耳鼻咽喉科講習会プログラム

司会 近畿大学医学部奈良病院 歌根 日有
開会の辞 日耳鼻奈良県地方部会 会長 奈良県立医科大学 北原 礼
座長 奈良県立医科大学 北原 礼

情報提供 (16:00~16:15)
アレルギー疾患治療剤「ルパフィン錠」について
田辺三菱製薬株式会社

保険に関する話題 (16:15~16:30)
保険医療委員長 庄司 和彦

一般演題 (16:30~17:00)
座長 天理よろづ相談所病院 虎嶋 剛

I. 3D顔認識システムによる精緻な顔面運動評価
天理よろづ相談所病院 橋本 稔平

II. 治療に難渋した中耳真珠種症例
奈良県総合医療センター 成尾 一彦

特別講演 (17:00~18:00) (領域講演)
座長 奈良県立医科大学 北原 礼

「アレルギー性鼻炎と慢性副鼻腔炎の最近の私の治療方針」

島根大学医学部 耳鼻咽喉科学講座
教授 坂本 達則 先生

開会の辞 奈良県耳鼻咽喉科学会 会長 玉木 克彦

◎特別講演・領域講演の途中退席はお控えください。



本日、嚴重な感染対策の元、第92回奈良県耳鼻咽喉科講習会がホテル日航奈良にて開催されました。関連病院の奈良県総合医療センター成尾一彦部長が一般演題で、「治療に難渋した中耳真珠種症例」につき講演しました。特別講演では、島根大学医学部耳鼻咽喉科学講座教授の坂本達則先生に「アレルギー性鼻炎と慢性副鼻腔炎の最近の私の治療方針」をご講演いただきました。治療に難渋するECRSなどについても、坂本先生のご経験を踏まえて詳しくご教授いただけ、特に若手の鼻副鼻腔炎手術をおこなっている医師には非常に有意義な時間になりました。

2021年11月5日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。本日金曜午後は5回生のための1週ポリクリ総括+めまいクルズでした。総括は「耳硬化症」の診断と治療のポイントについて、4人4様にしっかりまとめてくれました(1人公休)。疾患統計上「耳硬化症」は本邦ではそれほど罹病率は高くなく、したがって久々にこの疾患に出会うと診断にとまどうことがあります。乳突蜂巣の発育が不良な場合は鼓室硬化症を疑う必要もありますし、混合性難聴を呈すると蝸牛型メニエール病との鑑別に苦慮することがあります。両側低音障害型の混合性難聴で少しめまいでもしようものなら、両側メニエール病と類似してきます。病気はやはり診断され病名が付いてこそ、適切な治療法が提案できます。「めまいは原因不明では治らない」と題する市民公開講座を、11月24日水曜に奈良市医師会館で開催します。WEB視聴もごさいますので、めまいでお困りの方に告知ください。ちなみに、12月は呼吸器内科・室 繁郎先生のご担当です。

2021年11月6日

第30回 奈良県耳鼻咽喉科感覚医学講習会

日時：2021年11月6日(土) 16:50 ~
形式：Web配信(Zoom ウェビナー)
ウェビナーID:916 7046 6139 パスワード:1106

【製品紹介】 16:50~16:55
【開会の辞】 16:55~17:00
奈良県立医科大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座
病院教授 山中 敏彰 先生

【総合司会】 奈良県立医科大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座
教授 北原 礼 先生

【特別講演1】 17:00~18:00
『 鼻腔生理機能から見た
鼻アレルギー・花粉症への対応 』
広島大学大学院 耳鼻咽喉科学・頭頸部外科学
教授 竹野 幸夫 先生

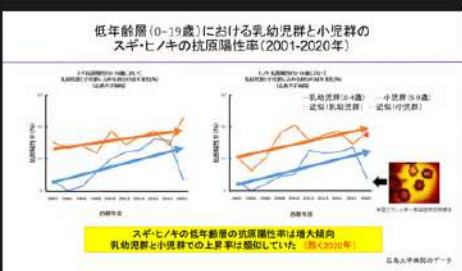
■領域講習
【特別講演2】 18:00~19:00
『 進行性メニエール病への対応 』
大垣徳洲会病院 耳鼻咽喉科 部長 青木 光広 先生

【閉会の辞】 19:00~19:05
奈良県耳鼻咽喉科医会 会長 玉木 克彦 先生

代表世話人 奈良県立医科大学 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 教授 北原 礼 先生

※日本耳鼻咽喉科学会耳鼻咽喉科領域講習 (1単位) の認定を受けております。
※日本医師会生涯教育講座 (2単位) を申請中です。

低年齢層(0-19歳)における乳幼児群と小児群の
スギ・ヒノキの抗原陽性率(2001-2020年)



スギ・ヒノキの低年齢層の抗原陽性率は増大傾向。
乳幼児群と小児群での上昇率は類似していた。(2020/2021年)

本日の話題

1. 最近のメニエール病診断はどうなっているか
2. 進行性(難治性)メニエール病にはどう対処するべきか
3. メニエール病の難聴進行や両側化を必要か

例年6月頃に開催している奈良県耳鼻咽喉科感覚医学講習会ですが、新型コロナウイルスの影響により前回開催が3月に押したため、第30回は本日土曜午後、参加者全員全面的リモートにより開催されました。特別講演1：広島大学医学部耳鼻咽喉科頭頸部外科・竹野幸夫教授に「鼻腔生理機能から見た鼻アレルギー・花粉症への対応」、特別講演2：大垣徳洲会病院耳鼻咽喉科めまい難聴センター・青木光広部長に「進行性メニエール病への対応」をご講演いただきました。いずれのご講演も、奈良県の耳鼻咽喉科医にとって、明日からの臨床に大変有意義な内容でした。ご講演ありがとうございました。



2021年11月8日



本日は非常に嬉しいお知らせがあります。市立奈良病院で初期研修中の中道奈都子先生が先ほど私達の仲間入りを表明してくれました。後期研修は西和医療センターで始めてもらうこととなります。仕事と家庭の両立、さらに専門医取得を指導・支援していきたいと思えます。



2021年11月12日



2021年11月10日(水)~12日(金)、東邦大学医学部耳鼻咽喉科(佐倉)主催で、第80回日本めまい平衡医学会総会・学術講演会が、東京JPタワーホール&カンファレンスにて、慎重な感染対策の下開催されています。東京駅ほぼ直結、天気も良く、皇居周囲の紅葉も色づき、非常に良い雰囲気です。当科および関連病院からは、北原教授の教育セミナー「難治生めまいに対する手術治療とリハビリテーション」をはじめ、一般口演・ポスター合計8題の演題を持って参加しています。さて、昨日は学会中にとてもうれしいお知らせが届きました。現在当科で研修中で学会にも参加している石田千恵先生が、来年度から奈良医大耳鼻咽喉科入局を表明してくれました。来年からの後期研修でも、一緒に働けることを非常にうれしく思います。最後になりましたが、2022年11月16日から3日間、第81回日本めまい平衡医学会総会・学術講演会を、奈良県コンベンションセンターにて主催させていただく予定となっております。コロナ感染症の蔓延が収束し、沢山の先生方を紅葉満載の奈良にお迎えできるようになっていることを期待しております。



2021年11月13日



奈良県耳鼻咽喉・頭頸部外科セミナーは、新型コロナの影響で昨年は中止、今年は座長と講師のみ現地参加での完全リモート開催となりました。例年、奈良県大和郡山市のLe BENKEIでオシャレに開催されるのですが、今年は参加者の集まりやすい場所ということでSwissôtel 南海大阪の一室となりました。特別講演では、金沢医科大学耳鼻咽喉科学講座 教授 三輪高喜先生に「嗅覚障害とCOVID-19」について、関西医科大学耳鼻咽喉科頭頸部外科学講座 教授 岩井大先生に「甲状腺疾患：基礎と臨床」についてご講演いただきました。



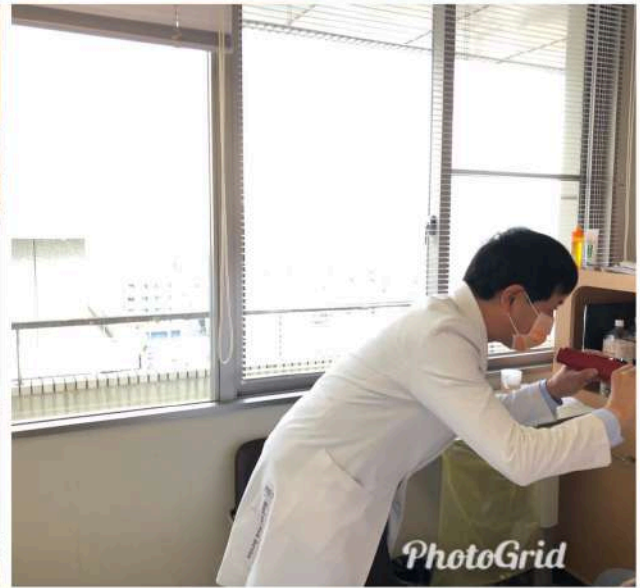
2021年11月19日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。本日金曜午後は、5回生最終組の1週ポリクリ総括+めまいクルズでした。このあと12月中旬から新5回生の1週ポリクリが始まりつつ、年末冬休みに入ります。総括では「真珠腫性中耳炎に対する診断と治療」について。アブミ骨が消失しており、底板周囲に病変が広がる症例。鼓室形成術を段階的にすべきか否か、症例ごとのプランニングについて、5人5様にしっかりまとめてくれました。米大リーグ・エンゼルスの大谷翔平選手が18日(日本時間19日)、リーグの最優秀選手(MVP)を満票で受賞しました。大谷選手は目標を達成するために、マンダラ・チャートを作成していたことは有名な話です。国家試験にしろ専門医試験にしろ、目標に向かって計画的に進めるのが苦手な方は、 $9 \times 9 = 81$ マスまでは必要ないにしても、簡単なマンダラ・チャートを作ってみると、自分が次に何をすべきかがわかりやすいのではないのでしょうか。専門医更新を目指す方は、明日・明後日にすべきことは秋季大会@パシフィコ横浜に。



2021年12月6日



本日から新学年(新5回生)を迎えて、診療参加型臨床実習が新たにスタートしました。現在の新型コロナ感染者状況を踏まえ、これまで休止せざるをえなかった教授回診を再開し、ポリクリ学生には症例検討会にも参加していただくこととしました。

感染対策をかねて回診の参加医師も最小限にとどめ、症例検討もポイントをしっかり絞ることで学生にも要領よく理解できるよう心がけ、可能な限り短時間で終わるよう配慮しました。

本日はさらに、先日まで当科で初期研修していた衣川博貴先生が、来年度から入局してくれるとのことで挨拶に来てくれました。医局の新たなスタートに喜ばしいお知らせが加わりました。



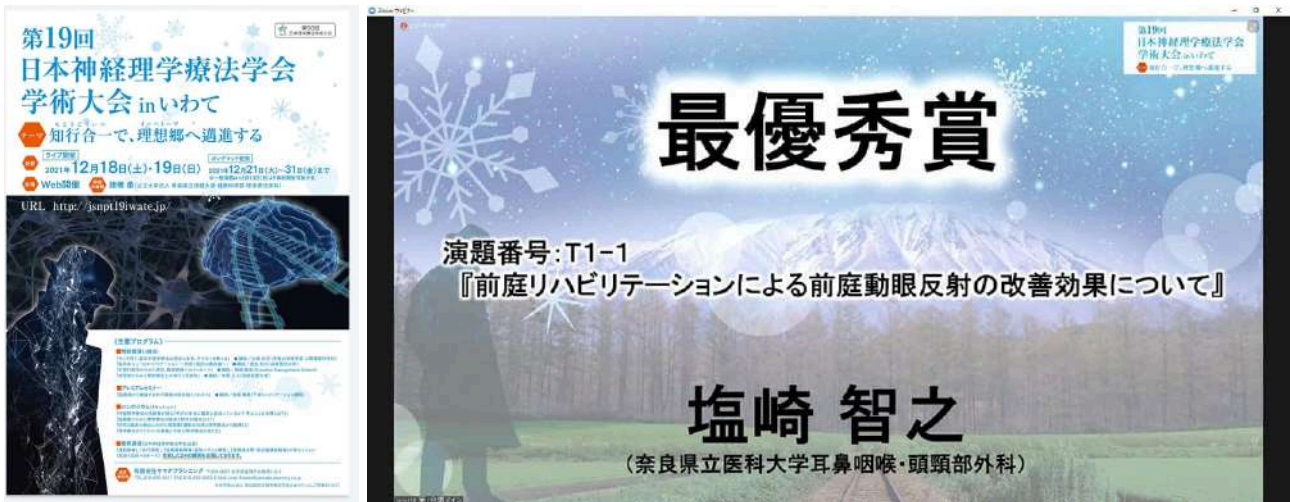
2021年12月10日



耳鼻咽喉・頭頸部外科学の北原です。今週から新5回生の1週ポリクリが始まりました。本日金曜午後は新5回生の1週ポリクリ総括+めまいクルズをさせていただきました。今年最後のポリクリです。この学年からは例年通り、一人一症例をレポートしてもらいます。今週は、先天性真珠腫、メニエール病、下咽頭K、鼻腔乳頭腫、前頭洞嚢胞、甲状腺乳頭Kと、耳鼻咽喉科の特徴でもある広く全領域にバランスの取れた症例を勉強してもらうことができました。このことから、入院・手術症例が新型コロナ前の状況に戻りつつあることを感じます。これから一年間、この調子で講義と実習を進められることを期待します。今年も残り3週間。良い週末をお過ごしください。



2021年12月19日



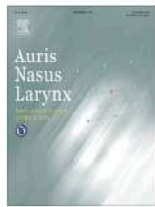
第19回日本神経理学療法学会学術大会が2021年12月18～19日でWEB開催されました。2000人以上の方々が参加され、盛大に行われました。

当科からは塩崎智之助教が「前庭リハビリテーションによる前庭動眼反射の改善効果について」という内容で演題発表しました。理学療法士にはまだ浸透していない前庭リハビリテーションについて演題でしたが、約250演題の中で最優秀演題賞を受賞することができました。本演題は慢性期末梢前庭障害患者においても前庭動眼反射の改善がみられる可能性を示す内容でした。日本から世界に前庭リハビリテーションのエビデンスをさらに発信できるように奈良医大では今後も尽力していきます。



2021年12月23日

Home > Journals > Auris Nasus Larynx



ISSN: 0385-8146

Auris Nasus Larynx

The Official Journal of
The Oto-Rhino-Laryngological Society of Japan, Inc.

Publishing options: Open Access Subscription

[Guide for authors](#) [Track your paper](#) [Order journal](#)
[Sample issue](#)

Submit your paper

With this journal indexed in 10 international databases, your published article can be read and cited by researchers worldwide

[View articles](#)

Editor-in-Chief > Editorial board



Yukio Katori, MD, PhD

2021年も残すところ1週間と少しとなりました。今年もコロナに向き合いながら頑張ってきましたが、その努力が立て続けに形になりました。若手医師、女性医師からのこの4件は格別です。2022年に入っての掲載となります。

1. Fujita-Hiroto, Kitahara-T, Koizumi-T, Ito-T, Inui-H, Kakudo-M: Investigation of endolymphatic hydrops positivity rates in patients with recurrent audiovestibular symptoms by inner ear MRI.

Auris Nasus Larynx, <https://doi.org/10.1016/j.anl.2021.05.009>

2. Sakagami-Masaharu, Wada-Y, Shiozaki-T, Ota-I, Kitahara-T: Results in subjective visual vertical tests in patients with vertigo/dizziness.

Auris Nasus Larynx, <https://doi.org/10.1016/j.anl.2021.08.010>

3. Matsumura-Yachiyo, Yamanaka-T, Murai-T, Fujita-N, Kitahara-T: Orthostatic hemodynamics in the vertebral artery and blood pressure in patients with orthostatic dizziness/vertigo.

Auris Nasus Larynx, <https://doi.org/10.1016/j.anl.2021.12.002>

4. Tanaka-Akihisa, Uemura-H, Takatani-T, Kawaguchi-M, Kawasaki-S, Hayashi-H, Kimura-T, Kitahara-T:

Resection of brachial plexus schwannomas while monitoring transcranial motor evoked potentials: report of two cases.

Auris Nasus Larynx, <https://doi.org/10.1016/j.anl.2021.11.012>



2021年12月27日



2021年も残すところ1週間弱となりました。依然続くコロナリスクを鑑み、本年度のB病棟8階忘年会と秋岡先生・田中先生の送別会をWeb開催で昨晚施行しました。秋岡先生・田中先生は大学院では頭頸部腫瘍を主に中心に研修されましたが、来年からはともに地域の基幹病院である近大奈良病院とベルランド総合病院で耳鼻咽喉科全般の患者様を担当いただき、どんどんスキルアップを行っていただく予定です。奈良県立医科大学耳鼻咽喉・頭頸部外科は、メンバーもすこしづつかわりますが、心機一転、気持ちを切り替えて診療に当たれるようにしていきます。